岩手県
盛岡市
釜石市

AD BOAT PROJECT
漁師　佐々木洋裕さん
菅原靴店　菅原誠さん

P4 10

漁船をF1カーにして“漁業の町”を復活させる

津波で漁船を失っても、漁業を続けたい

世界三大漁場のひとつ、三陸漁場を持つ釜石市。現在、釜石の港には津波によって傷つき、廃船となる漁船が並べられており、タコ漁を専門にしていた佐々木さんの船「第三漁裕丸」も、この場所に引き上げられている。震災のあった三月はナメタガレイが産卵期を迎え、漁も忙しくなる時期。佐々木さんは父親の漁を手伝うため、海岸で網の準備をしていたところで地震に遭った。津波が来ることを知り、近くにあった資材を軽トラックに積んで高台に避難したという。

「避難した高台から自分の船も、父親の船も、それから実家も、洗濯機のような状態でグルグルまわって流されていくのを呆然と見ているだけで、何も考える余裕はありませんでした」

船を失ったのは佐々木さんだけではない。所属する漁業組合には五〇〇名以上もの漁師がいる。奇跡的に残った船は数艘……。つまり、何百という船が被災したのだ。かろうじて廃船を逃れた船も、修理をする造船所が被災していたり、資材（漁具）が津波で流されているため再び漁に出る目処は立っていない。船が廃船になると、漁を再開するためには新しい船が必要になる。しかし、生活の糧となる漁を行なえない状況のなか、多額の費用を捻出して船と資材を購入するのは難しい。

「私の船は四・九トンですが、同じサイズの船をつくる費用は四五〇〇万円。仮に船を注文できたとしても、完成するのは一年半後の春だそうです。漁をするためには、船だけでなく樽や網などの資材も必要です。私の場合は漁をはじめて一〇年ほどですが、父や先輩は何十年もかけて準備してきたので、一千万じゃ足りないくらいの資材が流れてしまいました」

三陸の海と漁師である父親の背中を見て育ち、一度は内陸の会社に就職したものの、故郷で漁師になることを選んだ。津波の爪痕がくっきりと残る船を前に「ここに来ると涙が出る」と、ポツリと語る佐々木さんだが、一日でもはやく漁を再開したいと意欲を見せる。

「私は海も漁師も好きなので、体力が続く限りこの仕事をやるつもりです。これから漁業を守り立てて、“漁業を柱にしたまちづくり”をしていかないと、釜石の復興は見えてこないと思います。漁業関係者が頑張って、前以上に水揚げできる市場になってほしいですし、お母さんたちが働ける加工場などの産業も大切です。そうやって、地元の人が地元で穫れたもので食べていけるような町ができればいいなと思います」

新しい船の購入は、復興への大きな一歩となる。今、佐々木さんは新たな方法で再び船漁に出る日を待っている。それがスポンサーを募って漁船を購入するプロジェクトだ。

photo : WAWA Project

一〇年、二〇年、支援し続けるためのビジネス

漁師たちを支援するプロジェクト『AD BOAT PROJECT』の発起人は、盛岡市で靴店を営む菅原さん。靴と漁船という不思議な組み合わせだが、そこには菅原さんならではのアイデアが隠されていた。

「震災直後は、靴を一万足集めて届ける活動をしていました。やがて、現地でも靴屋さんが再開しているのを見かけたときに、僕なりに“復興”を考えてみたんです。岩手県沿岸部のほとんどは、すべてのビジネスにおいて漁が中心。ならば、やはり漁を復活させるしかないと思いました。（釣りが大好きだったこともあって）知り合いの漁師さんに会いに行ったときに“いちばん欲しいものは？”と尋ねたら、“船がほしい”という話になるんです。私はファッション関係の仕事をしているので、広告のことも少し勉強していました。そこで、F1カーのように企業ロゴを漁船に付けて、スポンサーを募るかたちで漁師の方を助けられないかと考えたんです」

つまり、『AD BOAT PROJECT』ではプロジェクトの主旨に共感した組織や企業が、そのロゴマークを漁船に描く“広告料”が義捐金となる。世界各国から集められた義捐金が、まだまだ被災地に行き届いていないという現実がある一方、このプロジェクトでは支援をする側に対して「みなさんのお金でこのような漁船を購入できました」と明確に表現できることが特徴でもある。

「スケールの大きなプロジェクトなので、まずはひとつ事例をつくりたいですね。そうすれば、大手メーカー・ブランド・海外の会社にもプレゼンテーションができます。賛同してくださる企業には、この“広告漁船”を使って新しいビジネスを考えていただきたいですね。一〇年、二〇年かけて沿岸部を支援していくためには、企業側も多少なりとも利益を得なければ長続きしません。震災ビジネスが成立する時期にきていますし、お客さまにも賛同していただけるものだと思います」

幸いにも地震の影響が少なかった盛岡市は、岩手県沿岸部にもっとも近い街であり、被災者の声がいちばん届く場所でもある。『AD BOAT PROJECT』は、盛岡市と沿岸部をしっかりとつなぐ役割を担っている。

「僕たちは船を用意して、漁師さんが漁に出ていくところまでサポートしていきます。漁を復活させて、漁師さんたちには笑って暮らせる“普通の生活”に戻っていただきたい。今後はスポンサー（支援者）・『AD BOAT PROJECT』（受け入れ先）・漁師、この三者にとって幸せな計画を進めていくことが、最高のかたちだと思っています。そこがうまくいけば、この先何年、何十年も続く“復興”が可能になると考えています」

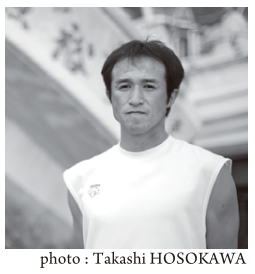


photo : Takashi HOSOKAWA

▼写真右
今回の津波により漁船を失った佐々木洋裕さん。『AD BOAT PROJECT』が成功すれば、佐々木さんが第1号のモデルケースとなる。

▼写真左
盛岡市で『菅原靴店』を営む菅原誠さん。『AD BOAT PROJECT』の発起人。アパレルブランド「GEKKO」とのコラボレーションによる“GEKKO震災復興支援パーカー”も企画。

AD BOAT PROJECT

企業やブランド、団体様からいただいた広告費で、漁師が所有する船に企業ロゴをまるでF1レースカーのように船体にレイアウト。「AD BOATオフィシャルサイト」内で、漁や支援船の様子などを紹介することで、支援先と支援企業のリアルタイムなコミュニケーション手段を構築し、港街の復興を一緒になって実感するプロジェクト。

お問い合わせ／アドボートジャパン
岩手県盛岡市大通2-2-12
http://www.adboatjapan.com/

宮城県
塩竈市

ままのて　鈴木千夏さん

すべては子どもたちの笑顔のため“ままのて”でつながるネットワーク

“お母さん”だからできたこと

震災から八日目の三月十九日、塩竈市に住むお母さんたちのために、紙オムツや粉ミルクなどの物資情報、赤ちゃんの入浴サービス情報が掲載された『塩釜ママ情報掲示板』が立ち上がる。この掲示板を立ち上げたのは、塩竈市在住の鈴木千夏さん。それまでウェブサイトは“見る専門”だった彼女を一気に動かしたのは、守るべき“子ども”の存在だった。3・11、鈴木さんは七ヵ月の赤ちゃんと、五歳になる息子と自宅で地震にあう。津波警報を受け、紙オムツだけを持って小学校へと避難し、帰宅したのは一〇日後。しかし、帰宅しても紙オムツやミルクを購入できる店は営業しておらず、開店していても子どもを抱えて二～三時間並ばなければならなかった。

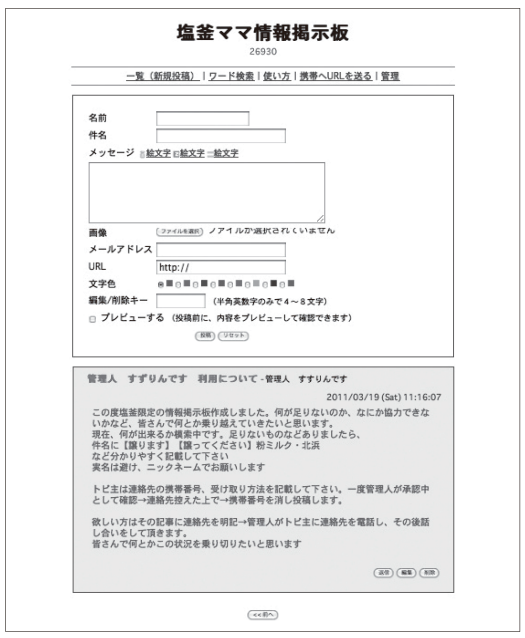
「並んで買えるならまだいいんですけど、買えなかった場合、寒空の下で小さな子どもを連れてまた別のお店を探さなければいけません。“ここに紙オムツがあるよ”そういった情報があれば、お母さんたちは助かるんじゃないかと考えました。そこで、この状況を乗り越えるためにみんなで情報を共有できる掲示板を立ち上げたんです」

掲示板を立ち上げ、“これから何ができるだろうか？”と考えていた鈴木さん。ちょうどその頃、同じ思いを抱いて活動する“お母さん”と出会う。

「現在『ままのて』として一緒に活動している須藤さんも、三人の子どもを持つお母さんです。彼女は避難所にいる子どもたちの衛生状態が気になって、自宅にあったミルクや洗浄綿を集めて避難所のお母さんたちに配布していました。共通の知人を介して知り合ったとき、“塩竈できちんとした活動ができないか？ ママたちの支援ができないか？”という話になり、『ままのて』をスタートさせました」

一〇日間以上も入浴できない状態が続き、オムツも満足に替えられない……。肌もかぶれ、寝付きも悪く、泣き出す子どもを前にして、いてもたってもいられなくなった『ままのて』が最初に取り組んだのは、“赤ちゃんの入浴サービス”だった。水の出る地域で湧かしたお湯を衣装ケースに入れて運び、いつ・どこで行うかを掲示板で告知。その後も、友人・知人から届いた衣類やサプリメントを避難所で手渡しする活動を行っていた。やがて、その活動が役所の目にとまり、塩竈市に届いた物資の配布を依頼されるようになる。

「『ままのて』のメンバーは、みんな同じ思いを抱いて個人で活動していたんです。でも、例えば“入浴サービスをやります”というのをラジオで告知したいとき、“どこの団体ですか？”と聞かれます。そこで一個人だと取り合ってくれないんですね。個々に活動しながらも、『ままのて』の名前を活用することで活動が広がっていきました」



この掲示板で、多くのママたちが救われた。

一〇年後も子どもたちが笑顔でいられるように

子どもたちを想う強い気持ちで結ばれた『ままのて』のお母さんたち。仮設住宅や地域の町に物資を届けるため、夜を徹して仕分け作業を行い、二ヵ月の間に七回の“配布会”を実施。徐々に店舗も再開してきたことから、現在『ままのて』は次の活動に向けて動き出している。

「私の知人は、旦那さんを亡くされて“今後どうやって生きていこうか”という状況にありました。どんなことができるかわからないのですが、“力になりたい”と思っています。でも、いくら力になりたいと思っても、同じ経験をしていない私たちができることは限られてきます。やはり、同じような経験をされた方とのお話のほうが、力になるし、勇気になると思います。今後は、心のなかに閉まった気持ちを少しずつ出せるような“場”をつくって、その手記を少しずつでもかたちにしていけたらと考えています。そうすることで、子どもたちが大きくなったとき“あのときこうだったんだよ”と伝えていけるようにしたいんです」

子どもたちの涙からはじまった『ままのて』の活動は、震災から四ヵ月を経て、子どもやそのお母さんたちを笑顔にしていく取り組みへと変わりつつあるのだ。

「子どもを持つお母さんたちの想いというのは、本当に強い。守るべきものが、すぐ近くにいますからね。そうしたお母さんたちの“強い想い”を大切にしながら、今後も活動を続けていければと常に考えています。そして、子どもたちが五年後、一〇年後も笑顔でいられるような社会をつくっていきたいです」

photo : Reiji OHE

ままのて

活動地域は塩竈市の被災地区。仮設住宅・塩釜沿岸部での配布会・子供向けイベントを実施。今後、ママ目線での震災体験談を通じ、次の震災に備えて情報提供を予定。大切な方を失ったグリーフワークも視野に入れながら、被災した方に対して、中期的な支援活動を行う。

お問い合わせ
Email : shiogamamama@gmail.com
http://mamanote2011.blog.fc2.com/

photo : MAMANOTE　「お茶のみ会」で笑顔を取り戻す

東北各県

写真救済プロジェクト
富士フイルム株式会社
e戦略推進室
吉村（よしむら） 英紀（ひでき） さん

失われた町の記憶をつなぎとめるために写真と記憶を救い出す

一枚でも多くの写真を救いたい

テレビ報道などで、瓦礫（がれき）や泥の中から写真が拾い出される映像を見た人も多いだろう。家も町も流され失ってしまった人たちにとって、写真は、なくなってしまったものと自分とをつなぎとめるかけがえのないものだ。潮に浸かり泥にまみれた写真は、汚れをきちんと洗い流さなければ、最後には像が消えてなくなってしまう。未曾有の大震災を受け、多くの人と同様に、吉村さんをはじめ富士フイルムの人たちはいてもたってもいられない思いだった。本震から一週間経った頃、瓦礫の中から自衛隊や地域の人たちが拾い出した写真が避難所に集まっているというニュースが流れ始める。それを受け、三月二十四日、富士フイルムのサイトに、水に浸かった写真を洗う方法がいち早く紹介された。しかし、これは十一年前に名古屋市周辺で起きた水害の経験を元にした情報だったため、津波の被害に応じた洗浄方法を見つけようと、同時に同社神奈川工場の技術部門で海水や泥水を使って検証を実施し、より詳しい洗浄方法を逐次アップデートしていった。

メディアでの報道や被災地からの問い合わせも増え始め、被災地に行かねばという思いを強くしていた時、富士フイルムが写真洗浄サポートをするという新聞記事を見つけた気仙沼の高井さんという方から問い合わせが入った。気仙沼でいちご農家を営む高井さんは、震災後近隣の階上（はしかみ）地区の避難所に集まった思い出のこもった品々や、写真の洗浄をしていたのだ。

まだ被災地のガソリンや物資不足に被災地訪問の自粛が呼びかけられていた頃、吉村さんたちはこの高井さんを訪ねた。

「現地に行って分かったのは、集まっている写真のほとんどがお店でプリントされたもの、つまり当社の製品だったんです。これは、自分たちがやらずに誰がするのだ、と強く思いました」

瓦礫から拾われてきた三千枚程の写真をお預かりし、社内ボランティアを募って洗浄を行い、対処法が有効なことを確認すると共に、洗浄に必要な道具（ガスコンロ、はけ、ばけつ、アルバム等）を確認した。こうして、正式に「写真救済プロジェクト」活動がスタートした。

洗浄方法は富士フイルムのホームページ内で動画を流したり、ゴールデンウィーク前には、被災地域のテレビ・ラジオで写真洗浄方法を紹介するCMも流した。「写真が汚れていても、あきらめないで」というメッセージを伝えたかった。

写真は個人の思い出に強く結びついた繊細なもの。持ち主不明の写真を地域外（持ち出す許可を誰も出せないため、現地に足を運ぶ必要があった。その後富士フイルムの人たちは、東北各地の八十箇所に赴き、写真の洗浄支援活動を行った。「津波を受けて汚れた写真を洗浄する人たちの活動をサポートしよう」。シンプルな思いをメンバー全員が共有し、プロジェクトは迷いなく進んでいった。

季節が移り、気温が高くなって、バクテリアの影響が懸念されるようになる。写真の痛みが早くなるため、洗浄を急がねばならない。しかし、まだあちこちに莫大な量の写真が未洗浄のまま置かれていた。写真洗浄は時間との戦いだった。今、目の前にある写真を洗えば救える……。とにかく出来るやり方で洗おうと、地域の人に手順を教えて必要な道具を届け、ともに作業を続けた。

六月半ばを過ぎ、被災地では「地元での洗浄では間に合わない、地域外にも協力をあおごう」ということになった。気仙沼の高井さんも、この活動を通じて知り合った信頼できる人たちと連絡を取り、よその地域で写真の洗浄をしてもらうようになっていた。富士フイルムでも、足柄にある同社の体育館で気仙沼の写真洗浄を開始。土日も平日も、多くて八十名ほどの社員やOBがのべ千五〇〇名参加し、十七万枚以上の写真を洗った。徐々に、気仙沼以外の地域からも洗浄の依頼が入るようになって、ネットワークが広がっていった。

八月半ばから、アーツ千代田3331でも写真の洗浄ボランティアを富士フイルムとの共催で実施。東北に赴く前から、3331の体育館を使って洗浄ができないだろうかというイメージを持っていた吉村さん。被災地で洗浄活動をともに行った3331のスタッフもいて、体育館に並ぶ写真に逸（はや）る気持ちを共有していた。二〇一一年十月は三週間連日で、朝から晩まで多くの人が入れ替わり立ち替わり写真洗浄を行った。

アーツ千代田3331で行われた「写真救済プロジェクト」風景

写真があることで、そこにいた証になる

四月に訪れた気仙沼・階上の避難所で、吉村さんは避難所のリーダーの方から聞いた言葉があった。

「家は流されてしまったけれども、写真が戻ってきてとてもうれしかった、と。流された人はすべて流され、流された人に残っているのは記憶しかないが、町の風景も何もかも失ってしまい、時間とともに記憶も薄れていってしまう。でも、写真があることでその場所で今まで生きてきた証をもてるし、復興の支えにもなる。だから、ぜひ活動を頑張って続けてください、っておっしゃるんですね。写真というモノの持つ力を再確認するきっかけになりました」

photo : wawa project

返却会場には、写真をとりにきた人たちが自由に書き込めるノートが置いてある。

「きれいになった写真を受け取った時は、涙が止まりませんでした。自分の今までの生活をすべて失ったような気持ちでいたので、確かに私たち家族はここで生きてきたのだと思えて、本当にうれしかったです。」

今後は、洗浄した写真を持ち主に返していくことと併せて、もっときめ細やかな写真洗浄も支援していければと吉村さんはいう。例えば仮設住宅一軒一軒で保管されているであろう写真にも対応する仕組みづくり。各大学のボランティアセンターなどと連携し、大学生が短期間、仮設住宅を訪ねて洗浄するようなこともできるのでは。東北支援を希望する学生たちにとっては東北へ向かう理由となり、地域の人と交流するきっかけも作れるのではないかと考えている。

もうすこし未来のことをいうと、もっとアルバムを身近にしていきたいと吉村さんは語る。「最近はデータ保管が当たり前になっているけれど、今回、洗浄をしていて、写真アルバムを作りたいと思っている人は多いと感じました。震災後の新しい思い出もアルバムに編集することで“今”を大切にするきっかけにしてほしいですね」

これからは、プリントされた写真の力を未来をつくる活力に変えていく。

※わわプロジェクトでは今後も継続的に被災地写真洗浄ボランティアの運営のサポートを行います。

福島県いわき市小名浜

地域活性プロジェクト【MUSUBU】
株式会社 ethicafe
代表 末永（すえなが） 早夏（さやか） さん

フクシマから世界へ宝を発信する

当事者になってはじめてわかったこと

震災後、一気にその名前が世界中に知られることになった“福島”。ネガティブなイメージばかりが伝わってしまうなかで、自分たちの町が持つ“良いもの・宝”を発信していこうと活動する団体がある。

それが福島第一原発から五〇キロ圏内にあるいわき市小名浜（おなはま）出身者で結成された『地域活性プロジェクト【MUSUBU（ムスブ）】』だ。メンバーである末永さんは、いわき市でフェアトレードのコーヒー豆を販売する『株式会社ethicafe（エシカフェ）』の代表でもある。末永さんの支援活動は震災直後、【MUSUBU】の立ち上げ前にさかのぼる。

「原発建屋が水素爆発を起こした一日目に家族会議をして、そのときは自宅にとどまりましたが、翌日もうひとつが爆発したときには“ここを出よう”と東京に住む兄のところに避難しました。ただ、地元に残った友人たちから“地震以降まったく物資が入ってこない”と聞いたので、いてもたってもいられなくなり、“物資を自分で持って帰ろう”と考えました」

ツイッター上で物資・ドライバー・トラック募集の呼びかけを行ったところ、一〇〇名以上の人たちが集まり、トラック一台分の物資とドライバーを確保。すぐさま小名浜へ向かい、翌日には仕分けの協力をツイートした。すると、地元の若者一五名ほどが軍手とマスク姿で集まってくれたのだ。その後も支援物資の配布や炊き出しなどの活動を行っていたが、徐々に必要とされることも変化する。四月十三日に支援物資部隊をひとまず解散し、次の活動に移りはじめた。

「復旧・復興活動だけでなく、長期的な地域活性を視野に入れて活動をしていこうと考えました。そして、一緒に活動していた地元出身者で『地域活性プロジェクト【MUSUBU】』を立ち上げました。その名の通り、“人と地域と世界を結ぶ”という意味を込めています。今回の震災を通して、はじめて自分が当事者になりました。そしてあらためて“いかに外の人たちに関心を持ち続けてもらうか？”ということが大切なんだと痛感しました。情報を発信し続け、これからも“福島で起きていること”を見続けていただきたいです」

“助けて”のメッセージから、宝を伝えるメッセージへ

いわきから明るいニュースを世界に発信するべく、【MUSUBU】は音楽イベント、スポーツイベント、仮設住宅に入居した人たちとのコミュニケーションづくりのための“場づくり”を企画している。六月二十六日には、津波の被害を受けた小名浜潮目交流館で『Hooked on Iwaki Vol.1―小名浜潮目交流館をキレイにして音楽を聴こう！―』を開催。まだ泥が残り、もちろん電気も通っていない会場を整備するところからのはじまりだった。「“Hooked on”には“夢中になる・ハマる”という意味があるんですが、このイベントをきっかけに小名浜が復興に向けて一歩踏み出したというのをメッセージとして発信していけたらと。会場となった小名浜潮目交流館は津波で大きなダメージを受けていましたが、前日の二十五日にボランティアの方に呼びかけて泥の掃除をして、発電機を入れて、照明をつけて、翌日のイベントに備えました。一〇年ほど前にいわき市の海岸でプロモーションビデオを撮影したミュージシャン“くるり”に参加していただき、大雨の中、多くの方に集まっていただいて、とてもあたたかい雰囲気のイベントになりました」

テレビや新聞など、いわゆる“ニュース”の中に登場する“福島”の文字は、不安や悲嘆とともに私たちの目に入ってきてしまう。しかし、その外側にはそこで暮らす人たちの生活があり、文化があり、新しく生まれていくものもある。【MUSUBU】が発信するのは、そうしたところにある“宝を伝えるメッセージ”だ。「【MUSUBU】は常に“ワクワクすること”をやろうと考えています。そのことによって、携わってくださった方が一緒にワクワクして、それがみなさんに伝われればいいなと思います」

十月にはいわき踊りに参加、十一月には東京デザインウィーク二〇一一に出展するなど、活動と交流が広がっている。

photo : jouji SUZUKI

地域活性プロジェクト【MUSUBU】

福島県いわき市と東京を拠点に活動中。地域活性活動の企画・運営、イベント企画・運営、商品のコラボレーション企画や開発、PRも行う。オリジナルアイテムを販売するオンラインショップもオープン。

お問い合わせ
http://musubu.me/
オンラインショップ
http://musubu.shop-pro.jp/